攝州合邦辻

座本　豐竹　此吉

地住吉の岸の嵐も霞むらん。遠里小野と聯ねしも早や立ち替る霜月下旬。四社明神の鎭火祭和光のかげの瑞籬や。老若男女貴賤の差別なく歩みを。運ぶ神德は。フシ治の御代の印かや。地派手ならず。ハルフシ憎からざりし。執成も。出立榮せし屋敷風。河内の國の一城主。高安殿の奥方玉手御前。後に續いて御代櫛俊德君と御親子の。名はありながら年配は廿の上は過ぎざりし。桃李の姿百の媚。あてやかなりし御粧ひ。腰元婢女附々も輕う。小オクリ出立つ忍びの詣。裾吹返すフシ松風に。留木の薫り媚かし。地外珍らしき腰元ども。詞ホンニ今日は奥様や若殿様のお蔭故。久しぶりで住吉參り。よい男の見飽きは目の正月藪入り取越致しました。ナウ小菊殿。サレバイノ奥様や若殿様に。參り下向が見惚れてもお傍へ寄り付かれず。時々わしらがお尻のあたり。ひり〳〵するは奥様のお腰の廻りのお身代り。地疼さ堪える辛抱もこれも忠義ぢやないかいのと。しどなき話に奥方もフシ笑ひ催し給ひける。地俊德丸は慇懃に。詞屋敷よりは餘程の道母上様にも嘸お疲れ。鎭火祭の神事まで神主方へ御入あり。地暫しが間御休息と。隔てし中も隔なき。フシ孝行深く見えにける。詞ヲヲようこそ心が付きました。例年當社の鎭火祭いつもは殿様御社參なれど。折悪しい御所勞父御の名代そなたの參詣。自らとても我が夫の。武運の祈り御病氣も御全快遊ばすやう。地神に願ひの今日の催し。神樂を奏し神酒頂戴俊德殿にもいさ〳〵と。堅い親子の挨拶も武家の行儀はくどからず。腰元引連れしづ〳〵と。フシ神前さして詣でらる。地鮑魚の肆腥きを知らずとかや。同氣相求むる世の習ひ。高安左衞門通俊の外戚腹。治郎丸とて大前髪あとに引添ふ壺井平馬。惡の腰押す一つ穴狐もいやがる狼武士。浪人めいたる侍引連れ。密事と見えて三人が一つ所に寄り擧り。中にも平馬が差配ばり。詞豫々申上げ置きたる京地の浪人。棧圖書とはこの仁。御詞を下し置かれ然るべからんと。地壺井が詞次郎丸打點頭き。詞フウ嘸に聞いたる棧圖書とは其方よな。我高安の惣領とは生れながら外戚腹ゆゑ次男となり。高安の家督は俊德丸と。京都へ願ひの眞最中。地さすれば

我は家來同然。肩身を窄むる無念奇怪。折もあらば家國を押領せんと工む折しも。詞幸ひ父の病中といひこのどさくさに俊德丸ぶち殺すか毒害か。殺してしまふ仕樣は樣々。差詰め家督は次郎丸。心をかけし俊德が許嫁。和泉の國陰山長者が娘淺香姫といふ手入らずも。自然と我が手に入る道理。地何も彼もよい事だらけ。心がかりは家老の主税。高安の繼目の綸旨。病みほうけても親通俊。詞寶藏に納め鑰は腰付。こつちへたくる術は其方。此儀首尾よく仕畢せなば兩人は執權職。地心得たるかと當もなき。水の月取る猿智慧の。フシ早呑込みぞ愚なる。地平馬は猶も圖に乘つて。詞委細の樣子は圖書殿にとつくと牒し合したれば綸旨は追付け御手に入れん。お氣遣ひは御無用御無用。成程貴殿の御意の通り。萬事は拙者に御任せ何彼の手筈を密談せん。ホヽ、出かした〳〵。さりながら。こゝは人立。委細はあれにて主從堅めの盃せん。地兩人續けと次郎丸。欲と惡との三鐵輪オクリ打連れへてこそ。フシ急ぎ行く。地草に育てど褄はづれ。賤しからざる小娘の。脊に草鞋手に振。ハルフシ落葉搔くなる松蔭に。其處よ。フシ此處よと人待つ風情。地社の方より俊德丸。社家の馳走の醉さまし供をも連れず只一人。出合ひ頭に御姿。一目見るより戀風のぞつとする程美しき。顏に見惚れて取落す。さらへる戀のいろ手本。師匠は波のうかれ舟。フシ岸に寄りたき思ひ也。地若殿も最前より。心は付けど然あらぬ躰。詞誠や古歌にも。小夜更けて。あられ松原住吉の。浦吹く風に千鳥鳴くなり。ハテ面白やと地獨り言ハルフシあてやかなりし御風情。地思ひ余つてこなたの娘。いつその事と抱付く。コハ怪しからずと俊德君振放して逃げ行き給ふ。袂に縋る藤葛やう〳〵と抱き止め。耻しい事ながら。繪にある樣なそのお姿。高安の若殿樣に。在所育ちの不束な私等が。惚れたとは冥加ないやら。勿體ないやら憎い奴ぢやとお蔑視。お呵り受けても大事ない。戀に貴賤の隔は無いとや。たつた一言不便やと仰しやる事も叶はずば。いつそ殺して〳〵と。スエ縋り涙に暮れ居たる。詞ホヽ、迎ひの輿入遲き故。我が心を引き見んとあられぬ賤の其姿。和泉の國陰山の息女淺香姫と。地詞に今更耻しの。洩るゝ我が名をそれぞとは知つて難面い今の仰せ。詞許嫁はありながら。是まで爲の取り遣りばかり。地お顏見たさに此姿。もしや殿御の移り氣がありもやすると。ナホス疑ひは。ハルフシ思ひ過した女の心。この住吉と高砂の松さへ。契る妹脊中。しんき〳〵の年月を。思ひやりなきお心と涙はあられ。松原に

時雨ハルフシ降りしく。風情なり。地脊撫で按り俊徳君。我を我と思へばこそ供をも連れずこの有様。心づかひ忘れはせじさりながら。詞折悪しき父の御病氣。嬉しい心は度々の。たに知れどもこれ迄も打過ぎしは右の譯。父上の御病氣も。御全快し給はゞ輿入とても程あるまじ。先づそれ迄は互の辛抱。此方とても思ひは同じ必ず恨み給ふなと。地詞嬉しく淺香姫そのお心を聞く上は。案じる事は無けれども。始めて逢ひ見る今日の首尾。ついに此儘に別れとは。辛氣な事やと俊徳の。膝にのゝ字の物鹿子。おぼこはフシ戀の眞身かや。詞ハテ聞分けない淺香殿。父母よりお免しの婚禮濟まぬ其中は。かうした仕儀を母様のお目にかゝらば互の爲。殊更隔てし中といひ。地未だお年も若ければ踏付けた所爲ぢやと。思召しても孝行立たずと。戀は知つても武家育ち。フシ堅いに困る其中へ。フシカゝリ社の方より白張の。袖も色めく神子姿。目元に張りの鈴振立て。俊徳丸に託宣あり神の移らせ給ふぞと。しづ〳〵と分入れば。ハゝゝゝはつと俊徳君。御託宣とは有難やと。頭を下げて聞き給へば。嚴しげに袖かき合せ。詞よくこそ神樂に神の慮をいさめてくれた。悦びの餘りこの神子に。託して事をフシ苦ぐるなり。それ天地開け初めて後。伊非諾伊非冊の二柱の御神。天の浮橋のフシ上に立ち。床入さしやんしてより以來。陰陽和合國の大要。何ぼ堅い神々でも。野暮天神も空神も。ハズミこれを。嫌ふ者はないに。詞俊徳丸ばかりは。何故堅いとのフシ御託宣。詞可愛さうに淺香姫が。逢はう〳〵を樂みに遙々と此處まで來て。早う嫁入したいとの心願は。よく〳〵はずんで居ると思ひ。神の慮にたんと不便な。許嫁あるからは女房に違ひはない。盃したせんには依らぬ程に。何處ぞ其處邊の木蔭でなりと。マア嫁入の内上をしてやつたら宜からうとの御託宣。アゝコレ〳〵申し。よも神樣が左樣な猥は仰有るまい。イヤ〳〵疑ふまい〳〵。神のいふ事聞かぬと。これからもう守りやせぬぞ〳〵。親の許しがないなどとは。今時の息子には似合はぬ。不粋な〳〵との御託宣。エゝさりとは姫ももどかしい。何ぼ堅い男でも。女の方からべつたりと仕かけると餘り否がりもせぬものぢや。ツイ袖から袖へ手を入れて。抱付け〳〵との御託宣と。地無理に突きやるよい拍子。ひつたり抱付く女夫中。サアしてやつたと悦ぶ神子。彼處の陰より立出るお供に扣へし奴入平。詞さつても吸があぢやつた。明神樣の託宣ごかし。お姫樣の日來のお願ひ。今こそ叶うて嬉しかろ。オゝこちの人悦ばしやんせ。主

従三人言合したこの趣向。神子殿の裝束借つてあられもない御託宣。ホ、、、、。イヤモウこの入平も物陰で最前からの濡事。神子殿の鈴よりも持前のこの鈴に。餘程さんばい仕兼ねたわい。エ、コレそんな事いふ手間で願うてもないこんな首尾。どこぞ靜かな所はないか。お二人ながらやりましたい。そこらを拔つてよいものかい。人影のない奥の天神。地水茶屋の簾の屏風。善は急げぢや御出と。夫婦が差配取り〳〵に勸め。立てたるフシ其所へ。地本社の方より腰元小菊。それと見るより手をつかへ。詞これにお渡り遊ばすか。最前より奥様のそれは〳〵御尋ね。先程神樂も濟みまして。神前の神酒洗米。御頂戴遊ばしませとの御口上でございますと。地いふうち又も出て來る腰元。詞奥様これへ御出と。地聞いて悦り姫俊德。追付そこへ此場を早う。〳〵〳〵と眴の仕方。呑込む入平お樂も倶に放れ難なき淺香姫。御手を取り〳〵フシ急ぎ行く。地腰元どもは心得て松の木蔭に毛氈の。色透き通る玉手御前。神酒を移せし長柄の銚子。鮑の盃携へて。フシしづ〳〵彼所に立出で給ひ。詞神樂首尾よく相濟む上神前の神酒親子一緒頂戴せんため此處まで持參。コリヤ〳〵腰元ども。俊德殿にはこの玉手が。密に咄す用事もあれば。其方達は神主方へ。早う〳〵とフシ人を除け。地後先見廻し膝摺寄せ。詞人影の無いこの松原。神酒といふのは表向。堅苦しい挨拶はマア暫くは止めにして。打解けての酒盛サア〳〵地一つと件の盃。手酌に注いでついと乾し。差出し給へば。詞これは〳〵いつに勝れし母上の御機嫌。御盃頂戴致さんと。地押戴いてこれは大盞。而も風雅の鮑貝。御酌は憚り銚子はこれへ。イヤ其儘と注ぎかくる。酒はなん〳〵母の命。辭するは慮外と呑乾し給ふ。其手を取つてじつと締め。詞今の盃合點かえ。これは母様何なさるゝ。合點かとは何を合點。ハテ姫御前の方から殿御へさすは妹背の固め。この松原は取りも直さず。祝言の大嶋臺。尉と姥との友白髮。今更否とはいはれまいと。地聞くよりハツト俊德君。悦りしながらハ、ハ、ハ、。詞母様の御酒機嫌。あられぬ事をと立上る。地裾を扣へてコレ申し。詞酒にも醉はぬ氣も違はぬ。お前の母君先の奥様に宮仕の私。御奉公の始から。地その美しいお姿に。心迷うて明暮に。詞モウ打付けて言出そか。ゑと思へど落ちる恐れ。地此身の科は厭はねど可愛しい御身に浮名もと。辛抱するうち情なや。詞奥様もお過ぎなされて後。新奥方にと殿の御意。强つて辭退もお主の權威。背けば館に居る事叶はず。せう事なしの親顏を。

母あしらひの其辛さ。此儘ならば戀煩ひ焦れて死ぬる私が身。不便と思うて給はらば。わりない契りをこれ申し。やいの〳〵と縋れ寄り。箍む糸に戀の框。フシ母の行儀は失せにけり。地俊德丸は呆れはて暫し詞もなかりしが。詞エヽ情なや淺ましや。天魔の魅入か母人様。血こそ分けぬ現在の。子に戀慕とは何事ぞ。地聞くもうるさや穢しやと。立退き給へば縋り付き。詞母呼はり聞きとむない。年はお前に一つか二つ。老女房がそれ程いやか。否でも應でも惚れた〳〵。抱かれて寢ねば何時迄も放しはせじと抱き付く。地振放して涙を浮め。詞父への操を背くといひ。此世からなる畜生道。人の譏悪名も思召さぬか母上様。地何卒お心翻し本心になつて給はれと。諫の詞さまざまに。義理と孝行二筋のフシ涙は清水を詩へり。地こなたは猶も増しくる思ひ。詞畜生でも大事ない。是非とも夫婦と取縋る。地詮方盡きて俊德丸。突退け〳〵逸散に社の方へ入り給ふ。コレなう待つてと玉手御前。跡追ひ鳥の堺をと。フシ足もしどろに駈行く向うへ。地早や御迎ひの家來ども。詞若旦那には御先へお歸り。奥方様にもいさ御下向御乘物をと舁き居ゆる。地氣に染まねども是非なくも。詞俊德殿は歸られしか。自らもこれより下向皆供せよと何氣なく。地思ひを隠す乘物は。我が子に戀の道ならぬ。裏門通り高安のフシ館へこそは歸らるゝ。ハルフシはや沸暮の。黄昏時。待てども君の便りなく。主人を誘ひ入平夫婦フシ元の所へ立歸り。詞エヽ折角仕込んだこの仕組。肝心要の段になつて奥方の御出故。お姫様のお力落し。ヲヽこちの人の云はんす通り。併しあなたに如才はあるまいが。任せぬ首尾故お歸りあつたか。月に村雲花に風。ヲヽそれ〳〵。宵戎に大雨同然。御輿入も程あるまい。地一先づ館へお歸りとフシ姫を勇むる其所へ。地悪い事には目の光る次郎丸を先に立て。壺井平馬も諸共に淺香姫を奪取らんと。手ぐすね引いて駈來り。詞ノリコリヤ〳〵奴め。其姫には用がある。こつちへ渡しつッ走れ。二言辭ぬかすとぶち殺すと。云はせも立てずゑせ笑ひ。ホヽ終に逢はねど合點合點。許嫁ある御主人に横戀慕する敵役。付け廻しても叶はぬ〳〵。コリヤ入平がお供した。命に掛替あるならば。サア來い〳〵と尻引つからげフシ身拵へ。地ヤア返答無益と無法の主從。すらりと拔いて切付くる。かい潜つて腕首取り。一締締めて蹴返す早速。後に平馬が段平物。透さぬ入平身を開き腕がらみに眞逆様砂をかぶつた壺井が弱腰。力に任せ踏付くるを。コリヤさせぬはと次郎丸。締

めに來る手を肘返し。投付けられて兩人は フシ叶はぬ赦せと逃げ失せたり。詞ノリエ、どくにも立たぬがらくたども。さのみ長追ひするに及ばぬ。地イザ〳〵お立ちと入平夫婦。忠義は堅き誕生石。姫の思ひは反橋の。フシ渡りがたなき戀の橋。御輿入を松原の。葉越に見ゆる月代も。冴え渡りたる奴が働き。社の御前で大きな手柄。ハンヤ扨も器量者。和泉の館へ。三重へ歸らるゝ。地物の師と豐に見ゆる人さへも。走る師走の空なれど。フシ長閑に見えし檜皮葺。地河内一國一城主名も高安の館には。國主所勞の其上に俊德丸の大病と。家中の上下ひそ〳〵と蟲子に沸る湯にまでも。フシ手を當て心奥書院。地腰元婢女囁き合ひ。詞ナント若衆どう思やる。大殿樣はお年といひ御持病の事なれば。案じる程の事はないが。物怪なは若殿樣住吉參りの下向から。御病氣と云うて一間に籠り。大殿樣御家老樣お醫者樣の外はお逢ひなされぬ御大病。どんな樣子ぢやそなた知つてか。サイノ御大病〳〵と云ふけれど。三度の御膳も常の通り御食も落ちぬはめんよな事と。御典藥をたらして聞いたりや。御病氣は米俵一俵と二俵ぢやげな。おいとしぼい事ぢやないかいの。ハアそりやマア終に聞かぬ病。米一俵と二俵とは。飯たんと上つて脾胃虛とやらいふものかや。エ、あの人は不粹な人。一俵と二俵は三病ぢやわいの。ヤアそりや大抵の事ぢやない。地あれ程美しい若殿樣に。取付く病も多からうに。ひよんな事やと フシ一同に。吐息に交る涙壁。地高安の執權譽田主税が妻の羽曳野。出仕を知らす奥使。腰元どもは通路の鈴。綱引鳴らせば奥の間より。ハルフシ立出で給ふ玉手御前。しとやかに座に着き給へば。羽曳野は手をつかへ。詞大殿樣には先もじより段々に御快氣と。悦ぶ間もなう若殿樣の御大病。夫主税が江州多賀の代參も御本復の立願今明日には歸國の積り。大殿樣奥方さま。さぞ御辛勞に存じますと。地申上ぐれば玉手御前。詞ヲ、そなたのいやる通り。取分けて案じるは俊德殿の病の容體。夫左衞門樣主税之助典藥のほかは病架へ寄せず。病の曾惡療治の樣子。見聞きもならぬ母が思ひ。地主税之助留守なれば羽曳野は夫の名代。病家へ通つて機嫌を窺や。そなたの心で自らもそつと同道賴むぞやと。包むとすれど埋火の。戀の煩熱。フシ洩れ易き。地色目見て取り苦笑ひ。詞奥樣の仰の通り。夫主税之助申されましたは。留守中は名代役。若殿の御病家へ心を付けよとの事なれど。外に御介抱申す人もなく。たつたお一人ござるお腰間へ。深々と參るは世上の聞え。殊に又御器量

よしの俊德樣。夫を持つた女中にも袖褄引いて。あのゝものゝといふお方もあると聞けば。お傍へ行かぬが御奉公。地奥方樣はみづ〳〵と水の出端の若盛り。マア御遠慮を遊ばすが。よかりさうなものやうに。わたしは存じられますと。眞綿でしめる首械の。フシ子に戀させぬ利發者。地玉手御前は胸に釘。はつと思へど然あらぬ顏。詞成程いやるは尤もなれど。それは人に依つたもの。我が子の傍へ母が行くにさして遠慮もあるまい事。案內しや。サア病床へ。アヽイエ〳〵。競口に伯母樣とは昔の事。近年は母御でも油斷のならぬ世間の自墮落。ヤア言はして置けば慮外な雜言。主に向うて詞が過ぎるぞ。過ぎても足らいでもお家の爲。歸國する迄大殿と御典藥の外。唯の一人も若殿の御寢所へ寄せなとは夫が言付。河內一國しめくゝりする家老の詞は殿樣でも。お立てなさるが國の掟。平たうへば奥樣でも。叶ひませぬ成りませぬと。地急度きめたる家老の女房。色香も顏も花薊針はあれども フシしをらしし。地主の權威も理の當然。殊に疵持つ足の裏笹原ならで打騷ぐ。胸撫で下し フシおはする折ふし。詞勅使のお入と地告ぐる聲。よい立ち機會と奥方は。腰元引連れ入り給へば。いでお知らせと羽曳野も。フシ奥御殿へと急ぎ行く。地勅使は時の傳奏役。高宮中將茂滿卿。疊さはりも荒々しくのつさ。〳〵と入來ある。館の主高安左衞門尉通俊。病中ながら衣服改め。出向ふ後に次郎丸壺井平馬も隨ひ出で。主從諸共末座に下り皆々。フシ平伏なし居たる。地勅使は上座に威儀を正し。詞勅諚の趣他の儀ならず。高安左衞門通俊老年の上多病にて。禁廷の在番勤り難く。一子俊德丸へ家督相續の願ひ奏聞に達せし所。天子にも聞召し分けさせられ。悖俊德へ家督勅許ある間。先年通俊家相續の砌。下し置かれし纖目の綸旨を相渡し。勅使に隨ひ俊德丸參內致すべきの條。臣。高宮中將へ宣下の趣斯くの通りと述べにける。左衞門謹んでコハ。有難き勅命。恐悅至極仕る。詞併し悖俊德儀。家督相續願ひの後折惡しき病氣に取合ひ。勅使の御前へも罷出でざる仕合。唯今の參內恐れながら當惑。此上の御惠に。上洛暫く延引の段。何卒勅使のお情にて。地禁廷宜しく御執成偏に願ひ奉ると。頭を疊に摺付くれば。詞ヤア自由らしい願ひ事。家督願ひの奏聞。三十日經つや經たず。病氣でござる參內は延引のと。一天の君を重祭坊に致すのか。この中將情は知らぬ。執成などとは上を恐れぬ慮外。早早俊德呼出し。纖目の綸旨も相渡せ。一寸も猶豫はさせぬと筋骨 フシ立てて睨め

付くれば。地我が子の難病差當る。難儀に
と胸ついたる通俊。次郎丸は脊をつき袖
引き。詞コレサ親人。こゝで彼のナ。勅
使設に拵へ置かれた。お菓子〳〵と氣を
付くれば。地點頭く通俊平馬は高聲。詞
お小性衆〳〵。最前の御菓子これへ持參
と。地呼はる下より小小姓が。携へ出づ
る目八分。勅使の フシ前に直し置く。地
勅使は猶もふくれ頬。詞女童をたらす樣
に。菓子で機嫌を取る追從。其手はくは
ぬ菓子も食べぬ。第一嫌ひ。望に無い持
つて行けと。地突きやる高坏打轉けて。
ぐわら〳〵〳〵と盈れるを。見れば家主
貞良夕顔ならで山吹散らす フシ小判の光。
地惚りしながら氣もそゞろ。眼に佛なく
取集め。仁躰崩れし高笑ひ。詞ハ、、、、
ヤコレハ〳〵仰山御馳走。さて結構な御
菓子哉。第一我等菓子が大好。ハテ心の
ついたお饗應。ナニ唯今承れば。俊德丸
には病氣とな。それは氣の毒。冷える時
分隨分と大切に召され。綸旨渡さるれば。
少々參内は延引しても。苦しうない〳〵。
そこは中將が請合々々。コレ〳〵〳〵左
衞門殿。サア〳〵手を上げられい〳〵。餘
り慇懃。近頃迷惑仕ると。地金氣で弱る河
童公卿。尻口合はぬ。フシ追從輕薄。地
通俊少しは安堵の顏色。詞ハテ御用捨の
段有難し。織目の綸旨は寶藏より取出し
奥の亭にて奉らん。御休息旁あれへ御入
り下されかしと。地いふに中將打點頭き。
詞如何やうとも〳〵。俊德丸織目の綸旨
は參内の上某が。早速申し賜つて相渡さ
う。先づ〳〵御遽が拜領ありし。織目の
綸旨は奥にて受取らん。地案内あれの詞
につき。主從三人前後に隨ひ オクリ奥の。
へ亭へぞ入りにける。地人なき隙を窺ひ
て。病の一間をそろ〳〵と。ホフシカ、リ忍
び出でたる俊德丸。詞賢き身にも佛神の
咎か何の報かは。癩病に色黑み。表具蛭
蠶の眉も凩の。木の葉と。散りて枯々の。
御有樣ぞいたはしき。ナホス奥口見廻し暫
くは。スエ涙にむせび。フシ居給ひしが。
詞思ひ寄らずも惡病に。苦む我が身は前
世の業。地唯悲しきは高安の。家名を穢
す殘念さ。嘸父上の御無念と。思ひ廻せ
ば身も世もあられず。生害せんとは思へ
ども。老いたる父に先立つ事不孝の中の
隨一と。聞けば死なれぬ我が命。とあつ
て館にあるならば自然と世上の人も知
り。父上ばかりか先祖の恥。詞其上嫡子
と立つたる俊德。家督の參内叶はずば朝
家の咎鼻束なし。元來我に先立ちて。出
生ありし次郎丸殿。腹は異れど父の胤。
某此家を立退かば家督相續相違もあるま
じ。殊更繼母の道ならぬ。戀慕と聞くも
穢らはし。早く此家を立退きて。地日本
六十餘州を廻り。神社佛閣に歩みを運び。

前世の悪業滅しなば。それぞ誠の罪障懺悔詞思ひ切つたり迷はじと。地立出では出でなから。生れ落ちて一日片時。御傍離れぬ父の顔。名殘に今一度見る事さへ叶はぬ フシ事が淺ましや。地これも宿世の業なるか今朝明方に父上の。忍んで病家に來り給ひ。ヤレ。俊德よ必ず歎くな。詞癩病とても百病の數には洩れず。聖人孔子の門人にも。癩疾の賢人あり。いかなる高位高官も遁れぬ病は恥ならず。人は何ともいはゞいへ。我が子の病をうるさしとも。穢らはしとも思ふ親が。三千世界にあるべきか。もしや若氣に恥辱と思ひ。短氣な心も出ようかと。案じて老の日も合はずと。地勿體なきお慈悲の詞。身にしみ〴〵と其時の。お顏が此世の見納めかと。聲もえ立てずかきくれて ノルフシむせび。歎かせ給ひしが。ハルフシ漸う心。押鎭め。詞人目にかゝらば止められ。詮なき事となりやせん。地せめては父へ一筆の。お暇乞と泣く〴〵も。違棚の料紙硯。蓋は明けても塞りし。胸の思ひを フシ書き殘す。フシハル折柄奥は勅使の饗應。調べる琴の音もさえて。歌三下り寄邊定めぬうたかたのいつそ泡とも消えはせで浮かれさまよふ身の行方。ナホス地我が身は一所不住となれば。もしや野の末山奥にて死したりとお聞きあるとも。構へて〴〵逆樣な御回向あつては彌〻増す罪。詞不便と思召すならば。打捨て置かれて下さりませ。三下り歌青葉々々と呼べども嶺の嶺の松風音ばかり松風嶺の嶺の松風音ばかりの便りもがなと託ち歎くぞ哀れなり。ナホス地歌の唱歌もひし〴〵と身につまされて。せきかくる涙。フシカカリ押へてしを〴〵と。立出で給ふ後より樣子は聞いた俊德樣。是程まで戀ひ憧るゝ私を捨てて胴欲な。虎臥す野邊の果迄も連れて行つて下さんせと取付き縋る玉手御前。あらうるさやと身を震はし。詞今更くどう申すに及ばず。母の身として子に戀慕。年月の御介抱御恩も慈悲も皆徒事。愛想盡きたる御心底。此世の對面是限りと。地振放しても放さばこそ。詞マア〴〵待つて下さんせ。日外もいふ通り。私は先の奥樣に使はれた腰元。親でもない子でもない。何所までも付纏ひ。地女夫にならにや生きては居ぬと。猶も放れぬ煩惱の犬ともなれ。廓ともなれ。放ちはやらじとくる〴〵〴〵。追廻り追廻れば。詞子の身として母上を手籠も是非なき此場の仕儀。赦させ給へと立寄つて。地通路の鈴の綱引寄せ。拳を合してしつかと括り。見返りもせず裏門口ハズミ行方知らず。フシなり給ふ。地斯くとは知らず羽曳野は。出合ひ頭に。詞ヤアこりやどうぢや。奥樣を誰が縛つたと。地

驚きながら駈寄つて。解く縛コレ羽曳野。詞俊徳丸は世を見限り此一通を殘し置き。家出とありしをとゞめた自ら縛つて置いて裏門から。エ、斯ういふ中も氣遣ひと。地駈出し給ふをしつかと捕へ。詞イヤモ。悔りも餘りきつい。虫が居つて何ともない。シタガ若殿の追手には。お前はちつと遣り難いと。地引摺り戻し聲張上げ。詞大殿様はじめ家中の面々。一大事あり早う〳〵の。地聲に驚く通俊公。次郎丸は平馬を引連れ。家中の諸士も一同に駈付け〳〵具の様子。聞いて皆々顏見合せ呆れ。果てたるばかりなり。地羽曳野は涙の際。これが則ち御書置と。差出せば通俊公。詞悴が國遠。殘念の涙にはあらねども。老眼なれば字性も朧。それにて讀めと。地身を背け涙を隱す武士の。スエ表を立てる。痛はしさ。地羽曳野一通押披き書き殘しゆ一通。一ツ適〳〵人界に生を請くるさへ廣大無邊の善果なるに。高安の嫡子と生れ何くらからぬ其上に。父母の御いつくしみ喜見城の樂みもこれに上越すべきとは存じゆはねど。計らざる身の業病。人中の交りも叶ひ難く。家の恥。父の御恥辱と存じゆへば。身の御暇を賜はり佛神に一身を抛ちゆはゞ。せめて惡業も滅し快氣の時節もゆはんと御名殘惜しき父上を振捨て。唯今國遠仕りゆ。次郎丸殿御事は。外戚腹とは申しながら惣領に極りゆへば。家督相續頼み入りゆ。次郎丸殿主税之助其他の一家中。彌〻忠勤怠りなく父上の輔佐肝要にゆ。地以上は讀ます羽曳野はわつとばかりに伏し沈めば。通俊公は。唾を呑込み瞬しげくおはします。心に笑を含みながら人前つくる次郎丸。咽ぎく〳〵と。ないじやくり。詞エ、聞えぬぞや俊徳殿。某を家督とは。この家國をしてやらうと。望をかける次郎丸と。思はつしやるか恥しや。親人や。俊徳殿へ言譯には。地切腹と差添に手を掛くれば。ヤレ御短慮と平馬は押止め。詞俊徳様への義理ばかりでお命を捨てられては。御家督の御男子なく。父君への不孝ばかりか。眼前にお家の斷絶。忠心篤きこの平馬が。諫言を聞き入れられ。地生害とゞまり下されかし。詞某とてもかはらぬ歎き。俊徳様の御出奔。是非なき事とは申しながら。お痛はしや無慚やと。地出もせぬ涙に目をこすれば。詞ヘエ、死ぬるも死なれぬ我が命。平馬推量してくれと。地主從手に手を取りかはし只。ワア。〳〵とどつてう聲。氣ばつて見ても出ぬ涙。旱魃の空に鳴り渡る。空雷の。フシ如くなり。地耳にもかけず羽曳野突立ち。詞ヤア〳〵家中の面々。折惡しき夫の他行。慮外なら自らが下知に隨ひ方々は。若殿の御行

方手分して詮議あれ。地妾も俱にと駈出すを。ヤレ侍て暫しと通俊公。詞俊德が業病も。過去遥々の報と思へば。假令家出に及ばずとも。往來しげき街に捨て。前世の罪を償はんと豫てより我が存念。某が詞も待たず。國遠せしは遺にも。通俊が子にて地ありけるぞや天晴健氣の俊德丸。さしも孝ある身の上に類少き難病は。何の因果ぞ恨めしや。其儘に打捨て置く父難面しと恨むるな。例は恐れある事ながら。延喜帝第四の皇子。蟬丸の宮も難病故逢坂山に捨てしぞよ。唯何事も定り事薄き親子の緣ぞと諦め。悔むな俊德。我も歎かじ歎かぬと。潔くは宣へど親子一世の憂き別れと。目にもる涙。はら〳〵〳〵。お道理樣やと羽曳野が黄ひ涙に奥方もフシ俱に袂を絞らるゝ。地始終を聞いて高安中將。奥の間より搖ぎ出で。詞繼目の綸旨は受取つたれど。家出した俊德丸。殊に難治の癩病人。再び此家へ歸つても家督などとは思ひも寄らず。というて一旦奏聞に及んだる家の繼目。べん〳〵と打捨て置かば高安の家は滅却。差詰家督は二男の役。次郎丸を急いで參内。心得されしか通俊と。地聞くより平馬しや〳〵り出で。詞ハ、御尤なる勅使のお指圖。サア我が君お請と。地勸める先折り。詞假にも一國一城の御跡目。輕はづみにお受とは底意の知れぬ平馬殿。夫主税之助は家老職。其家老の留守の間に。御家將定はわしがさせぬ。アイこの羽曳野が呑込まぬ。御二男の出頭でも陪臣同然。餘り出過ぎる。すつこんで居やしやれと。地齒に衣きせぬ理窟詰。平馬はひよんな高上りぶつとも得フシいはず眞面目顏。地次郎丸眼をいからし。詞ヤア出過ぎるとはそちが事。某を家督とは否應ならぬ勅使の御詞。それでも見事支へるか。ホ、ヽヽヲ、家國に望はない。言譯には切腹と。さつきの詞の裏が來て。こりや急に家國が。欲しうなつたか御二男樣と。地あちな所を押へられこれも。フシ同じく閉口す。詞ヤア勅使の前とも憚らず。我々の論談慮外至極。サア通俊返答何と。地何ととせり立てられて兩手をつき。詞次郎丸家督の願ひは。家老主税之助歸國次第。すぐさま上洛致さすべし。先づ御勅使には御歸洛近頃御苦勞千萬と。地お受の返答落着く中將。さらばと言捨て出でらるれば。御見送りと次郎丸平馬も俱に立出れば。奥方羽曳野引連れて通俊公は奥御殿。家中の諸士も一同に部屋々々。フシカヽリにこそ入りにけり。二上リサハリ既に。其日も暮近く。寒さを送る北風に。つれて降りくる白雪は。音せでいつか木々の葉も。庭も軒端も白妙に。飛石隱す ナホスフシ庭の面。地雪踏

分ける駒下駄も。晋せじものと傘に姿隠して羽曳野が。覗ひ居るとも フシ白書院。ハルフシ縁側傳ひ。忍び足。心もしめる高からげ。路金の用意帛紗物。心せはしく肌に付け庭へ。ひらりと下り立つて。地駈行く先にすつくと羽曳野。詞奥様何所へと聲かけられ。地思はずハツト飛退いて。フシ膝もわな〳〵震ひ聲。地臆する胸をじつと据ゑ。詞何處へ行かうと。自らが身は自ら次第。サアそこ退いて通した〳〵。イヽヤならぬ。路金の用意は俊德様の。跡を慕うて行く氣ぢやな。エヽ人でなし女畜生。血は分けいでも俊德様は子ぢやないか。母親の身で子に惚れて後の後まで付廻す。其根性を見限つて若殿の出奔も。三分はこなたの戀慕から。主ある身で不義いたづら。そんな人を今日まで。お主様の奥さまのと云うてやつたがむやくしい。先御前様に使はれた腰元のお辻殿。大殿に引上げられ。新奥方と俄立身。榮耀が餘つて年寄がいやになり。若い同士の若殿に濡れかける水鼎。猫といふか犬といふか。エヽ顔を見るも胸が燃えると。地胸の有りたけたくしかけフシかぞへ立てたる憎て口。詞ヲヽ口のある役。腹存分いひたくばいや聞きたうない。さすが賤しい家來の女房。曲り曲つた性根にくらべ。向う見ずの出放題。後悔は先に立たず。必ず跡で手をするなよ。ハヽヽヽ。家來呼はり聞きにくい。成上りの奥様と素性くらべがして見たいわいの。そんな穢らはしい根性でも。まだ主顔の權づけに。邪魔させまいと思やつても。金輪際動かしやせぬ。サア〳〵後へ戻つた〳〵。フウ。スリヤ實正そちが邪魔するな。ヲヽ。邪魔する〳〵。すんとする。ヲヽ妨すれば一討と。地丁ど受けたる傘の。骨を碎きし互の手練。雪は猶しも降りかゝり。凍える手先傘も。拔身も俱に取落し。一度に摑む髻髪。髦解けて亂髪亂心か白妙の雪を嶺立てて。へ挑みしが。地拾ひ上げた。傘の柄に。羽曳野が豁を一當。うんとのつけに倒る隙。玉手御前は飛立つ嬉しさ足を。フシはかりに走り行く。地若殿の國遠と聞くより宙を翔けるが如く。立歸る主税之助。其間に起立つ女房羽曳野。詞エヽ遅い遅い主税殿。都から勅使が來て。繼目の綸旨も請取つて御二男を御家督と。無理無體のあたまべし。俊德様は御出奔推量の通り繼母の横戀慕。跡を慕うてたつた今。サア〳〵早う追つかけてと。地聞いて驚く主税之助。詞若殿繼母は追つての事。合點のゆかぬ其勅使。追付いて一詮議。地何より大事は殿の身の上。急度守護なし奉れと。言捨てて又羣駄天走り跡を。慕うて。三重へ追つて行く。地山坂嶮岨

の龍田越。勅使は乘物立てさせて。フシ供廻り遠ざくれば。地次郎丸主從は目ばかり出した黑裝束。木蔭より立出でて。詞ヤレ〳〵圖書大儀々々。首尾よう行たも其方が働き。某が代とならば一廉に取立つるぞ。ヲヽ其段は平馬が請合。此上邪魔なは主税之助。彼奴を仕舞うて取る談合。イヤそこの所は氣遣ひなされな。折を見合せ忍び入り。圖書が手にかけ誅討。そつちも隨分ぬかりなう。氣取られぬが肝要々々。奪ひ取つたこの綸旨。地お渡し申すと差出せば。詞イヤ〳〵家老主税は大抵の奴でなければ。こつちに置くは浮雲物。氣の付かぬ汝が方に暫く預ける大事にせよ。家督の願ひ延引せば。大儀ながら又勅使。ヤ人の見ぬうち早歸らう。成程萬事は後日の密談。地いかにも左様と主從はフシ山路踏分け立歸る。地圖書は呼出す供廻り皆それ〴〵に雇ひ賃。算用半かしこより。息をはかりに駈へる間もなく。待つた〳〵勅使待つた詮議があると。鐶打叩き仁王立ちに突立つたり。詞ヤア勅使に立つたる高宮中將。何奴なれば詮議呼はり。慮外の雜言退り居らうと。地きめ付けてもびくともせず。詞誰とは愚高安の執權。譽田主税之助といふ見通し法印。なんぼ勅使の乾の卦で離坤兌さうに罵つても。こつちが先へ坎の卦繰り。心から底から見抜いた麗公家。白狀ひろげば助けて呉れる。地意地ばつて冠り引拔かるゝは巽の卦で。艮せうぞや。フシとひやうまづく。地鐶際迄もひるまぬ圖書。ヤア詞麗公家とは何を證據。勅使に刄向ふ違勅の科。主左衛門が身の上迄後日の咎覺悟せよと。地おどしかけても嘲り笑ひ。詞ハテ盜人たけ〳〵しい。江州多賀へ參詣とは嘘の皮。此間上京して傳奏高宮中將様に。對面して來た主税に向ひ。又高宮とは似せ晒。無頼者の化顯はし。頼人があらう白狀せいと。地睨付ければむくりをにやし。詞エヽ失策つたか殘念〳〵。腹癒せには繼目の綸旨寸々に引裂くわと。地懐中より取出せば。詞破りなりと喰ひなりと汝が腹に入つた様。誠の綸旨は中將様へ。とうに差上げ置いたわやい。南無三これも失策つた。エヱ忌々しいと投付ける。地綸旨を取つて押戴き。詞やつぱり是が誠の御綸旨。中將様に逢うたも嘘。一ばいならず二盃まで。テモ大喰ひと嘲弄せられ。地無念と引拔き切りかくる。引外してどうど投付け。脊骨も挫げと。フシ踏へる鐵脚。詞サアうぬら手向ひひろがぬか。主を助けて見る氣はないか。アヽ何の〳〵勿體ない。私共は貳百宛で雇はれた雲助共。そのわろが難儀せうが微塵も構ごさなくい。御

苦労ながら迎もの事。紛になられる程とつくりと。地踏んで進ぜてやらしやつて。下さりませと頼み置き。皆散り〳〵になりにけり。地サア是からが一味の詮議と。引立て見ればぐにや〳〵〳〵。詞これは扨。さしてむごうもせなんだが。つい寂滅ひろいださうな。ハテ殘念と死骸を谷底。地投げやる向うへばら〳〵と。皆一様の頬かぶり頬を隠せし組子ども。抜きつれ〳〵切つてかゝる。詞ホ、、、拍子抜けのした所へ。ようこそ〳〵御出と。地諸手をひろげ鷲掴取つて投げ〳〵。童遊びの印地打ばらり〳〵と。三重へ人礫敵はじとや思ひけんフシ一度に逃げて行方なし。地先づは御綸旨奪返し。心落着く此上は。館にまします御主人大事。お家を窺ふ悪人輩。詮議仕出して一々捻首。國遠ありし若殿の。お行方尋ね誘ひ歸り。何卒本復。なし奉り。主君の家國長久と。神に祈るややつ此この。譽田が勇猛山を抜く主税之助と號けしも。理あり忠義あり。譽ありける武士と感ぜぬ。者こそなかりける

下の巻

地一千餘回の法の花始めてこゝに咲き匂ふ。上宮太子の救世の恩末世の衆生の御誓に。洩れず詣でる貴賤都鄙殊更衣更着時正の日。參詣群集は佛法の。フシ繁昌の世と知られけり。地俊德丸の許嫁淺香姫の中間入平。女房お樂も諸共に旅の草鞋脚絆がけ。南門の石段を假のフシ床几と立ち休らひ。詞何と見さしやんせこちの人。夥しい參りの人。御繁昌な事ぢやどざんせぬか。ヲ、其筈々々。常さへ賑むし天王寺。殊に今日は彼岸の中日。他國からも皆參れば。凄しい筈の事。ほんになア身の上に取紛れ。其心が付かなんだ。が道くだりも群集の中。色々に尋ねてもお姫様には得逢はず。まして俊德様らしいお方さへ見當らず。辛氣なことぢやないかいな。サレバ〳〵。許嫁の俊德丸。難病故に國遠ありしと。お聞きありお姫様も又家出。必定戀君の御行方。尋ね給ふと思ふ故こちら夫婦も跡を慕ひ。人立多い所々方々。尋ね廻れど雲を闇。ほつと鍬をぬかした〳〵。サアしんどいと言うて斯うして居ては。いつ迄も知れもせまい。ちつと又參りの衆に。尋ねても見たがよいと。地いふ中むら〳〵一連の。下向を見かけ小腰を屈め。詞卒爾な尋ね事ながら。十五六な氣だかい息女。色白く鼻筋通り。二皮目にて髪の艶。眞黒繻子の大振袖。又一人は十七八。ちと申しにくいが癲病人。一緒にか別々にか。其程は存ぜねど。もし御覽なされずやと。地尋ねかくれば。詞ヤ何といはしやる。美

しい娘と癩病人と。テモ木に竹といはうか。鐵棒に心天を。纏合した尋者。エ、聞えた。コリヤ風雅な娘御で。茶めかした心中ぢやの。娘は何ぼも見たけれど。顔ばつかり見て居る故。振袖やら黒襦子やら。一向對面仕らぬ。シタガ今椎寺の門の内で。子供が大勢手を叩いて。弱法師〳〵と囃すを見れば。目も見えぬ癩病人。邊りの人の咄には。元はよしある人の子なれど。どうでも過去で悪い事。した報ぢやといふ評判。俄盲でよぼ〳〵よろ〳〵弱法師。もう見ずとおかつしやれ。いぢらしい者穢い物と。地口々しやべりそこ〳〵に。フシ敷へてこそは行過ぐる。地夫婦は顔を見合して。疑ひもない俊德樣。さうでござんすこちの人。サア來い女房。ござんせと。夫婦は競ひ勇み立ち オクリ椎寺へさして走り行く。道が違うて。其跡へ。裏見いたはしや俊德丸。

思ひがけなき難病に。父の館を脱出でて。國境より方々と。迷ひ歩きて ナホス やう〳〵と。この里人の情にて埴生の小家に竹の杖。足も。痛げによろ〳〵と宿りに。フシよぼ〳〵歸られしが。地杖を力に立ち休らひ。前世の戒業拙くてかゝる難病盲目の。身と成果てしは過去の業因。歎くは愚痴の凡心と諦めながら慈父の恩。おくらで朽ちん殘念さよ。さりながら常々深き御慈愛。殊に寄る年弱る御身。嘸や跡にて御歎き。思ひやる程不孝の罪。又一つには淺香姫かゝる樣子を聞くならば。さこそ歎かん不便やな。詞鶯鳶の袞に立去る悲しみ。比目の枕に波の愁。地況や人間有爲の身の。妹脊の緣も消えがての。雪とも花とも見えわかぬ。此世からなる闇路の闇。かの一行の花羅の旅闇穴道の苦みも。斯くやとばかり身にしみ〴〵フシ不覺の。涙にくれけるが。地折ふし。さつと春風の。ヘルフシすげなく誘ふ梅の花 ハズミ袖や。袂に フシ散りかゝれば。詞ハ、異ならぬ梅の薫。色こそ見えね香やは隠るゝ。飛花落葉は悟道の緣。素より神にも佛にも。憎まれ果てし病の身。出離の網は煩悩道。切らではいつか佛意に至らん。思ひ出すまじ。地思はじと小屋の菰垂そこ爰と フシ探り。廻つて入り給ふ。地跡へえいさら〳〵えい。地獄の沙汰も錢次第。閻魔の御頂地車に。乘せて勸化の道心者。參り下向をあてにして。詞西門石の鳥居脇に建立の閻魔王。一錢二錢の多少によらずお志はござりませぬかな。〳〵。たつた一文か二文で。閻魔樣に近付になつて置くは德なもの。死にしなのよい心便り。奉加。地奉加といきせい張り。喋る間に往來の大勢。詞時々廻る閻魔の建立。彼岸をあてに此處へわせたの。アゝしたが悪い合點。當極樂土

とあるからは。この天王寺は直に極樂。閻魔がわせては大きな差合。コリヤ門違ぢやあるまいか。ハテお前方は悪い呑込。アノ芝居を見やしやませ。實方があれば敵役もある。鬼があればこそ佛もある。畢竟地獄は極樂の出店。其出店の番頭はこのわろ。番頭の氣に入つて置かずば。本家の極樂へ何と出入はなるまいがの。成程理窟ぢや。そんなら奉加に付く程に。いつもの樣に悪身の敎化が見たい〳〵。おつとそれは心得たが。跡で奉加をいじむぢと。云はしはせぬと尻輕に。地撞木おつ取り聲作り。詞惣じて今の人心。祭文二上り彌陀や。藥師や觀音地藏。佛ばかりを賴むのは片手打ちなる信心者。折には鬼や倶生神。閻魔王をば信心なされ。奉加にたんと付く人は少々悪い事をして。地獄へ落ちてもあつちに近付。そこらは醫の金次第。ナホヌ詞無間の釜で酒の燗。焦熱地獄で肴を燒き。三途川の船遊山。劍の山行なんどとて極樂淨土の樂みよりやつとましなる遊びあり。さすれば地獄極樂は元來一つ世帶なり。善悪邪正不二といふ。佛の敎はコレ。〳〵。この天王寺。地八宗九宗とせり合へど解ければ同じ谷川の。三水四石は フシ未來の導き。後生願への種にとて朝題目に宵念佛。三下り歌寺々の鐘の音裘き霜夜は三界無庵の。諸國走り廻り。後生願はどなどか佛にならさらん。方々よ此世は備假の浮世になもだ。〳〵蓮華經を唱ふべし。いふにや及ばず安き間の事なれば。元來は無實なもだ。〳〵と申さうずるには。餘念涙もをかしけれ。夜半夜念佛はそりや誰が爲ぞ。添はで別れしヤレ親の爲。鉦を叩いて佛にならば。鍛冶屋若い衆はヤレ皆佛。アレハサ。これはサ。踊出せ振出せしやんと振出せ。合今は念佛も空吹く風よ。かいて貰はう腥坊主念佛無間。ヲヽ。こゝな修業者は念佛が剝けたか剝けんかいつ見たぞヲヽ。佛も衆生も羅はあらじ。六拍子揃へて我が身を見れば。〳〵。さながら四季の〳〵。物狂ひよの。〳〵。一夜明けて〳〵。否でもござらぬ其折には。しげる松山の物狂ひ。今は心も亂れ〳〵〳〵〳〵てヤツチカサ。こつちかさ。ソツチカこつちかソツチカサ。さつさ龍田の花紅葉。ナホヌ地よいよ〳〵と諸見物三錢五錢先番後番。奉加の錢のばら〳〵と。フシ笑ひちらして別れ行く。地跡にとぼんと道心合邦。詞アヽよい年からげて飛んづ跳ねつ。これも佛の衆生濟度。諷ふも舞ふも法の聲。體も糊と草臥れた。一睡やつて又奉加。暫く閻魔の相住と。地車の上にヤツころり跡は フシ躰の肘枕。謡二聲出入の。月を見ざれば明暮の。夜の境を。得ぞ知らぬ。ナホヌ地早や

夕暮も近付かん今日ぞ彼岸の日相觀。目は見えずとも拜せんと。ホフシカ、リ小家の菰垂押上げて。西に向ひて音をぞなく。心を阿字の門に入り。合掌してぞおはします。ハルフシ夫故思ひ淺からぬ。淺香姫は俊德の。長地御身の上を聞くよりも有るに有られず和泉路を浮かれ出でつゝ御行方。尋ね迷ふもいつ迄か。フシ万代が池に辿り着き。地戀しき人はそこにとも知らぬはかはる俤の。顏もけやけき惡瘡の。臭氣いかゞと袖覆ひ。詞コレそこな乞食殿ちと物が尋ねたい。河内の國高安殿の御世繼。俊德樣といふ美しいお若衆樣。そもじの樣な病にて館の内を拔け出で給ひ。此國の内に迷ひおはすといふ噂。地もし知つてなら敎へてと。尋ぬる聲は淺香姫。ヤレなつかしやと云はんとせしが待て暫し。我が妻ながら耻かしや斯く見苦しき姿にて。それと名乘るも面伏。僞つて歸さんと思へど殘る輪廻心。世になき我を斯程まで慕ひ尋ぬる志。嬉しいとも。可愛いとも。いはん方なきはら〳〵涙。フシ襤褸の袖を絞らるゝ。地姫は不思議と見廻し〳〵。尋ぬる事は答へもせず泣いてばつかりござるのは。もしやお前が俊德樣かさうならさうと名乘つてたべ。我こそ妻の淺香姫と。立寄り給へば身を背け。詞歎きの體に其人かと御不審は道理ながら。お尋の人に付き。哀れ果敢なき事ある故。地思はず落涙致せしとフシ餘所にもてなしましませば。地詞の端を聞答め。詞尋ぬる人の身の上に。はかない事とはどうした譯。地早う語つて聞かしてと。氣をせき給へば俊德丸。詞さればお尋の俊德丸。去ぬる頃迄此所に。我も同じ病人故。朝夕伴ひ暮せしが。身の業病に世を見限り。我にも知らせず過ぎつる夜。この万代の池水に。身を投げ空しくなられしと。地聞くより姫はハアはつと。心は闇と呉服鳥あやも涙に正體なく。ナニ我が夫はアノ池に。沈んで世を去り給ふとや獨り先立ち自らに。物思へとや曲もなや。コハそも夢か現かと。ノルフシ伏し轉。びてぞ歎きしが。地漸うに起上り。二世とかはせし戀人に別れて存生へ何樂しみ。同じ藻屑と身を沈め未來は一蓮托生と。邊りの小石見まつめて帶や袂に拾ひ入れ。池の汀に駈け行くを探り廻つて俊德丸。振の袂をしつかと取り。詞コハ逸興なり先づ暫く。死んでは亡者の爲ならずと。地引留め給へばイヤ〳〵〳〵。詞いとしい夫を冥途の旅。一人はやらじ追付かんと。地振切る袖を猶引留め。詞ヲヽ貞心の程尤も至極。今は何をか包むべき。俊德丸入水とは僞り。未だ此世におはするぞ。先づ〳〵最期を留られよと。地いへども姫は聞入れず。

イヽヤ自らを助けうとて僞りの間に合ひ口。詞イヤ〳〵天地も照覽あれ。露ばかりも虛言ならず。フウ 地そんなら何所に我が夫が。詞ヲヽ、五日以前の曉方。滅罪の爲三十三所。順禮の旅立ありしが。申置かれし事とては病身といひ長の旅。何處いかなる所にて身を終らんも計り難し。もし我が妻と名乘る者尋ね來る事あらば。身を万代が池水に沈んで死せしと傳へてたべ。地咲出すも花散るも花いづれか此世に殘るべき。來世は半座の臺を分け長き契りは替るまじ。御身は未だ二八の齡。いかなる人にも身を任せ末の榮を待ち給へ。必ず恨と思はじと傳へくれとの遺言ぞや。早々故鄕へ立歸り。命全う生存へ。思ひ出する折々は亡き俊德の後世菩提。弔ひ進ぜさつしやるが。誠眞女の操ぞと餘所〳〵しくは云ひながら。切なる姫の心底を。思ひやる程胸迫り。溢るゝ涙を隱さんとしを〳〵立つて小屋の內。フシ心殘して入り給ふ。地姫は猶しも泣き焦れ。いかなる人にも身を任せ末の榮を樂めとは。二人の夫を持ちさうな自らぢやと疑うてか。過ぎし逢瀨の豫言は。皆僞りとの事かいな。難面いわいなとばかりにて フシ恨涙ぞ遣瀨なき。地境內殘らず尋ね盡し是非なく戻る入平夫婦。ヤアお姫樣かと走り寄り。何故こゝに御愁歎。先づ御安泰嬉しやと。脊撫で摩り介抱す。地姫は涙の聲振上げ。詞夫の行方の覺束なさ。そなた衆に樣子も云はず。國を拔出で此處彼處。尋ね廻つてアノ小屋の。癩病の盲人に夫の行方尋ねしに。五日前迄此所にましませしが。西國三十三所の觀世音。順禮のため行方なうおなりなされた悲しい咄。地今そなた衆に逢うたのは悲しい中にせめての悅び。こゝから直に自も夫の跡追ひ俱に巡禮。サア連れて行てたも早う往こと フシ小棲からげて氣をせき給へば。地入平は最前の噂といひ小家の乞食。合點行かずと姫女房。傍に招き呼き合ひ。小屋に立寄り聲咳き。詞フウ何と仰しやる。スリヤ俊德樣には順禮とな。然らば片時も道を急ぎ。先づ熊野路へ御供せん。地サア〳〵お出でと三人はわざと足音どし〳〵〳〵。遙に行過ぎ又そつと。差足拔足立戻り。フシ小陰に窺ひ聞くぞとも。地知らぬ替の悲しさは。思はず小屋を轉び出で。姫の行方はそなたぞと。目は見えねども打守り暫し涙に。フシ暮れ給ひ。地思ひ切つても凡夫心戀しゆかしと思ひ妻。名乘らで歸せし殘念は。そちの思ひの百倍ぞや。必ず恨みぞ淺香姫。さりながら斯ばかり世に淺ましき我が姿。それと名乘るも恥かしく。詞一つには繼母の戀慕。某が跡を慕ひ。國遠ありし噂を聞けば。もしもや外

へ洩れ聞え。俊徳此處にと知り給はゞ。尋ね來り給はんかとそれのみ氣づかひ二つには。地かゝる病も前世の業。佛の道に入らずんば罪の滅する事あらじと。煩惱の迷ひ晴らさん爲。難面くはもてなせし。詞唯悲しきは母上の我が父といふ夫を捨て。不義の戀慕の家出なれば。父高安殿御怒強く。終には搜出されて。無慙の最期を遂げ給ふも。地皆我故と思ふにぞ。業に業を積重ね。來世もいかなる地獄の苦しみ。フシ思ひやるさへ果敢なきぞよ。地とは知らずして順禮の長の旅路の甲斐もなく。尋ね逢はずば身も勞れ。我を恨みて死にもやせん。不便や可愛やいぢらしや。なつかしの淺香姫。せめて目なりと暗からずば。姿なりとも見んものを。現在の妻にさへ見遑へられしはいかばかり。見る目鬱悒くなりつらん。淺ましさよとどうど伏し フシ前後。正體泣き給ふ。地隱れ聞いたる三人は。堪へかねて大聲上げ。わつとばかりに泣き出せば。扨はそこにと驚きあわて。あら耻しやと逃げ給ふを。縋り付いて淺香姫。心強い俊徳樣。たとへ變りしお姿とて耻も遠慮も人による。夫婦の中を耻ぢ給ふは分隔のあるお心か。そりや余りぢや聞えませぬ。是程焦れて尋ね廻る妻の心をちつとでも。不便と思召すならばたつた一言可愛いと。云うて給はれ胴欲な。とは云ふものゝ痛はしや。玉を欺くあてやかな。お顏も手足も此樣に。變れば變るものかいのと。或は恨み或は喞ち。抱付いてぞ泣き給ふ。俊徳丸も今更にありし。フシ事ども悲涙。地入平夫婦は手をつかへ。詞いかなる惡病難病も。佛神の力醫藥の能。御本復なき事や候べき。御夫婦諸共我々が知るべの方へ御供申し。何彼の樣子御物語。地イザ〳〵御手をと姫女房。フシ取り〳〵介抱する所へ。地姫の行方を方々と尋ね廻つて次郎丸。家來引具し駈け來り。詞ヤア戀人これに居なはるか。アノうそ穢いどう乞食に付廻つて心中立か。惡い分別よしに仕いや。五體滿足何處もかも。ぎんばり返つた次郎丸。連れて往んで今夜から有難い目に合はしましよと。地引立てかゝるを突飛ばし。詞ヤア獅子舞鼻の千松面。汝が持つた太鼓の撥。お姫樣には不相應。皷の胴へ押込んで片手業が前髮相應。但し奴が厄介になつて見るかと フシ嘲笑ふ。詞ヤア糟奴めに物言はすな。殺してしまへ家來ども。地承はると拔連れ〳〵。切つてかゝれば入平夫婦。得たりと銘々かけ向ひ。落花微塵と切散らせば。コリヤ叶はぬと逃げ散る主從。フシ何處迄もと追うて行く。地跡には姫はハア〳〵〳〵。先も氣遣ひ此處も氣遣ひ。うろ〳〵としておはする所へ。

刀脇差打落され。丸腰ながら次郎丸。サアしてやつたと走りつき。姫を引立て行かんとす。盲摑みに俊徳丸。狼藉者と足首に。取付き給へばエ、面倒い。詞兄弟の誼だけ踏殺して取らさうと。振放して脊骨を三つ四つ。なう悲しやと淺香姫支へとめても孱弱き手先。こつちへどんせと引摺る後。畫寢の合邦小屋の菰。引千切つて前髪頭。すつぽり被せて引抱へ。詞コレ〳〵申しお姫様。こいつはわしが受取つた。俊徳様をアノ車に。お前は綱を早う〳〵。ソレ其道を右へ廻れば鳥居筋。西へ〳〵と走つた〳〵。後からわしも追付くと。地敎嬉しく俊徳の。手を引き車に法の人。どうした誼にこのお世話。詞ハテそこ所かい急な場所。様子は内で咄せう。ちやつと〳〵と氣をせいても。地孱弱き姫の力業。地動きせねば思はず知らず。詞エ、埒の明かぬと手を放し。地走りかゝつて押出す車。こゝぞと姫は一世の力足に任せて。フシ引いて行く。地菰投げ捨てて眼の埃こすり〳〵も次郎丸。追駈け行くをどつこい何處い。汝をやつてはこつちの南門。是にうへ牛頭天王の。地社の方へコリヤ〳〵〳〵。引戻されて次郎丸。憎い木茎入老耄めと。摑みかゝれば四手に組み。年は寄つても皺腕でも。まだ前髪に負けうかと。投げつ投げられ擲き合ひ。組んづ轉んづ七頭八倒。はずみに取つたる大髻。片手を内股に引被ぎ。この万代の池の水。泥坊武士に捨扶持と。どうど投げ込み逸散に見返りもせず。三重へ立歸る。地願以此功德鉦の聲止むが回向の白上げ。百萬遍の同行中座並上下の差別なく。心安居の岸はづれ合邦夫婦が志逮夜の料理そこ〳〵に。氣輕手輕の給仕こそ。フシ心一ぱい馳走なり。地講中一番乾煎口煎餅屋の槌右衛門。折箸片手に斜に構へ。詞ヲヽ奇特によう勤めさつしやる。見れば新しい戒名も張つてあれど。炬燵の棹や焙銅の様な字ばかりで一つも讀めねど。此様に味い事拵へて講中を呼ばしやるからは。どうで身中の佛でござらう。誰ぢや知らぬが頓生菩提と。地念佛に汁菜囓み交ぜる。蓮池の范煎やの婆。詞志の佛があると聞いた故。今夜の念佛は我一と精出したでいつもとは夜食も格別。麥飯にとろゝ汁。飛龍頭の平。蒟蒻の白瀝では。いかな亡者もずる〳〵と極樂へ辷り込み。しやりしやり佛にならしやろと。地いふもフシ馳走の追從口。地主合邦取繕ひ。詞今夜の百萬遍はいつと遁れぬ亡者の手向。國を隔てて暮す故命日も知らず。それで戒名も手作に。大入妙若大姉。御存知もない佛に御苦勞をかけまする。則ちこれが逆縁の成佛。心ばかりのほんの茶漬。何も

無くと御酒も三献。ようまゐつて下されと。地夫が挨拶女房は。眼には涙の含聲。詞久しう顔も見ず。死目にさへも得逢はぬむごい別れ。せめて未來を佛にと。御苦勞かけての百萬遍。ようこそ參つて下さりました。サアなるもならぬも格式で。地取りの盃面々に。ヲツトある〳〵溢れると。夫婦が强ぶん大分にコリヤたべ過ぎた滿腹と。膳は取れても俯向いて辭宜さへならぬ腹塩梅。詞いかい御造作御馳走と。地禮もそこ〳〵同行共。フシ皆打連れて立歸る。フシ跡に女房は。御明しの。灯はかき立てれど晴れやらぬ。スエ子故の闇の口説言。詞天にも地にも獨の子。やつぱり道心者の娘で置いたら。非業の最期もさすまいもの。なまなか河内一國の。大名の奥樣といはしたは親の科。地五年六年逢ひ見ぬ親子。病でもある事か苦しい死をする時に。詞嘸や親々戀しいと。思うたであろ。慕ひもせう。地今はの念に引かされて未來も迷うて居るであろ。可愛の者やいぢらしやとフシ身を平。伏して泣き喞つ。地合邦は尖り聲。コレ〳〵お婆。エ、同じ事を繰返して未練な述懷。不仕合ゆゑ十年以來。頭は剃つても心は昔の侍氣質。獨り娘を高安殿へ腰元奉公。奥方に引上げられても。親ありとも名乘らぬは。かういふ淺ましい姿故。我が子の肩身も窄らうと。折節の狀通にも。必ず〳〵親一門もない者と言募れと。くどい程いうてやつたも。娘の影で立身望むと。世上に云はるゝが面倒さ。潔白な親とは違ひ。子と名の付いた俊德樣に。無體な戀をしかけるのみか。跡までを慕ひ廻り。大恩の夫を捨て。家出したいたづら女郎。其儘にしてあらうか。早速に追人をかけ。地なぶり殺しにがな成つたであらう。不所存を提げた奴。子と思はねば不便にも。いぢらしうもなけれども。詞弔ひの百萬遍は折々の貢の禮。又見ず知らずでも劒難で死んだ者は。弔うてやるが頭の役。そなたも武士の娘だてら。エ見苦しい泣顔と。地叱れば婆は猶涙。可愛さうに其樣にむごたらしうは云はぬもの。かたはな子に不便をかけるは世上の赦し。女は誰しもある習ひ。詞二十そこらの色盛り。年寄つた左衞門樣より。美しいお若衆樣なら。惚れいで何とするものぞ。淫奔者の不義者のと。叱るのは生きて居るうち。死んだ跡ぢやちつとばかり。可愛やと云うたとて。地佛の咎もあるまいと。恨み歎けば爺親も。心の底は子を思ふ。歎を見せじと頭振り。詞アヽイヤ〳〵。我が子でも惡人を不便と思ふは天道へ敵對。坊主の役と一遍は弔うたれど。畜生めが其戒名。引破つてしまひなりと。そこらの事はそなた任せ。

抹香も切れたら盛りなりと。御明しも消えぬ様にしなりと。勝手にしやれ俺や構はぬ。滿更懇な他人の死んだ様にも思はぬ故。思はず涙がアヽいや。涙は出ねど年の科。此眼がかすんで。地〳〵と擦り赤めたる恩愛の。涙隱せど悲しさは。フシ聲の曇りに顯はれし。地夫の心くむ妻は手向の水の哀れげに。スエカヽリせめて未來の助にと燻ず。香の薄煙思ひは。富士の高根とも。袖は清見がせきとめて。涙押へる鉦の音。オクリいとしん〳〵たる夜の道地戀の道にはフシ暗からねども。地氣は烏羽玉の玉手御前。俊德丸のスエカヽリ御行方。尋ねかねつゝ人目をもオフシカヽリ忍びかねたる頬かぶり包み隱せし親里も。長地カヽリ今は心の賴みにて馴れし故郷の門の口。立寄る跡より入平夫婦。御兩所の御行方こゝとは聞けど奥方の。姿見るより樣子もと。戸脇に厚き藪疊。身を潛めてぞフシ親ひ居たる。地斯くとは知らず玉手御前。干破に洩るゝ細き聲。詞母樣。〳〵と地呼ぶは慥に娘の聲。詞ヤアわりやまだ死なぬか。殺さりやせぬかと。地立上りしが心付き。フシ振返り見る女房の方。鉦に紛れて聞えぬは。これ幸ひとフシ素知らぬ顏。詞母樣〳〵こゝ明けてと。地叩く戸の音聞き咎め。詞合邦殿。今こな樣は何とぞ云うてか。イヽヤ何ともいやせぬ。そりや空耳であろぞいの。イヤ空耳かは知らねど。ちらりと聞えた娘が聲。地ハテ合點の行かぬと立上る。詞さう仰しやるは母樣か。ちやつと明けて下さんせ。辻でござんす戻りました。地と聞いて悔り。ヤア詞戻つたとは夢ではないか。健にあつたか嬉しやと。地駈出る裾を取つて引留め。詞ヤイ〳〵ヤイ狼狽者。肌は觸れても觸れいでも。我が子に不義をしかけた畜生。侍の身で高安殿が助けて置かしやろ樣なければ。何の今迄存生へて。うか〳〵笑へは何しに來う。ア隱すより顯はるゝはなし。親は無いと云はしてもある事知つて。娘が手から度々の合力金。二人が命を養うたは。皆高安殿の御厚恩。其夫の目を掠め。畜生の心さげた娘。假令無事で戻つたとて。門端も踏まされうか。素より娘は切られて死んだ。が。今物いうたが娘なりや。それこそ幽靈。そなた氣味が惡うはないか。因緣の深い程死人になれば怖いもの。必ず門の戸明けまいぞと。地云ふに女房は。詞イヤ〳〵。幽靈はおろか狐狸の化けたのでも。今一度見たい娘が顏。もしや怖しい物であつて。目をまはして死んだら仕合。いとし可愛い子を先立て。生きて業を曝さうより。一目見たいと振切るを。猶引留めて。詞ハテ惡い合點。狐狸か幽靈なればまだしも。もし

眞實の娘なら。高安殿へ義理の言譯。以前は刀を差した役。親の手にかけ殺さにやならぬ。それがいやさに留めるのぢやと。地泣かねど親の慈悲心を。聞く子や妻は内と外。顔と顔とは隔たれど心の隔泣寄りの。親身のフシ誠ぞ哀れなる。地娘は涙押拭ひ。門の戸口に口を寄せ。父様のお腹立。フシお憎しみは御尤。地これには段々言譯あれど人目を忍ぶ此身の上。マアこゝ明けて下さんせと。泣く〳〵願へば母親は。詞アレ聞いてか合邦殿。言譯があるといの。聞いてやつて下さんせ。ハテ娘と思へば義理も缺ける。幽靈を内へ入れるに。誰に遠慮もあるまいぞえ。いかさまなう。此世を離れた者なれば。世間を憚る事もない。そんなら早う呼込んで。茶濱でも手向けてやりや。可愛や立寄る所はなし。幽靈も嘸饑るかろと。地身を背けるは泣く百倍。母は悦び門口の疾しや遲しと開く間も。お懐かしや懐しやと。縋る娘の顔容。前後見つ肌に手を。入れてもやつぱりほんの娘。嬉しや健で居たかいの。さうとは知らいで逆様事。アタ忌々しい百萬遍弔ひした夜に無事な顔。ひよつと夢ではあるまいかと。抱締め〳〵嬉し泣。父も程經る娘が顔。見たさに思はず立寄れど。以前の詞と世の義理を思へばちやつと飛退いて。手持フシ悪いぞいぢらしき。地母は漸う心をしづめ。詞世間の噂にはの。そなたはアノ俊德様とやらに戀をして。館を抜けて出やつたの。イヤ不義ぢやのと悪う云へど。そなたに限りよもや〳〵。さういふ事はあるまいの。嘘であろ。〳〵。嘘か。地〳〵と箸持つてくゝめる様な母の慈悲。面はゆげなる玉手御前。母様のお詞なれどいかなる過去の因縁やら。俊德様の御事は寢た間も忘れず戀ひ焦れ。思ひ餘つて打付けに。いうても親子の道を立て。難面い返事堅い程。猶いやまさる戀の淵。いつそ沈まば何所迄もと。跡を慕うて徒跣足。芦の浦々難波潟。身を盡したる心根を。不便と思うて俱々に。俊德様の行方を尋ね。女夫にして下さんすが。親のお慈悲と手を合せ。拜み廻れば母親も。今更呆れ我が子の顔。フシ唯打守るばかりなり。地父は鬼角の詞なく。納戸の内より昔の一腰提げ出で。詞ヤイ畜生め。汝にはまだ咽さねど。もとおれが親は青砥左衛門藤綱というてナ。鎌倉の最明寺時頼公の見出しに逢うて。天下の政道を預り。武士の鑑といはれた人。己が代になつても親の蔭。大名の數にも入つたれど。今の相模入道殿の世になつて。侯人共に讒言しられ。浪人して廿餘年。世を見限つての捨坊主。此姿になつてもナ。親の讓りの康直を。立て通した

合邦が子に。ようも〳〵汝が様な。女の道も人の道も。無茶苦茶な娘を持つたと思へば。無念で身節が碎けるわい。高安殿が今日迄。汝を助けておかつしやる。御心底を推量するに。もと汝は先奥方の腰元。後の奥方に引上げうとあつた時。強て辭退しをつたを。心の正直懇望で。無理やりに奥方姿。アヽ手をかけず奥様とも云はさずば。この仕儀にも及ぶまい。殺さにやならぬ様になつたも。皆我が業とお身の上を顧みて。親への義理に助けさつしやるを。エ有難い恥しいと。思ふ心が芥子程でもあるなら。假令どれ程惚れて居つても。思ひ切るに切られぬといふ事はないわい。それに何ぢや。其態になつても。まだ俊德様と女夫になりたい。親の慈悲に尋ねてくれとは。ドヽどの頬げたで吐かした。あつちから義理立てて助けて置かしやる程。生けて置いてはこつちも又義理が立たぬ。覺悟せい。ぶち放すと。地早や抜きかくる刀の鯉口。母は取付き詞コレ合邦殿。ソリヤ了簡が違うた〳〵。お慈悲で助けて下さる娘。お志を無足にして。殺して義理が立ちますか。ハテ此上は隨分と意見して。俊德様の事思ひ切らし。命の代りに尼法師。地いかなる科の囚人も助かるは衣の德。浮世を捨つれば死んだも同然。どこへの義理も立つ道理と。奥へ指さし様々と宥め賺して母親は。我が子の膝に膝摺寄せ。詞聞きやる通りの様子なれば。どの様に思やつても。そなたの戀は叶はぬ程に。ふつつりと思ひ諦めて。早う尼になつても。地十九や二十の年輩で器量發明勝れた娘。尼になれと勸めるは。どんな心であろぞいの。助けたいばつかりに花の盛を捨てさせて。かゝれとてしも黒髪の百筋千筋と撫でしもの。剃らねばならぬこの仕儀は。何の因果とばかりにて縋り付いて。泣き居たる。地娘は飛退き顔色變へ。詞エ、譯もない事云はしやんすな。わしや尼になる事いやぢや〳〵。折角艶よう梳き込んだ此髪が。どうむごたらしう剃られるもの。今迄の屋敷風はもう取置いて。地これからは色町風隨分派手に身を持つて。詞俊德様に逢うたらば。あつちからも惚れて貰ふ氣。怪我にも假にも。尼の坊主の。云出して下さんすなとけんもフシほろゝに寄せ付けず。地さう吐かしやモウ堪忍がと。父が身構へ母親は。詞ヲヽ道理でござんす。腹の立つも尤もぢやが。モウ半時かしひて一時。わしに預けて下さんせ。手の裏を返すやうに。思ひ切らして見せませう。夫婦に成つて長の年月。地たつた一度のわしが願ひ。聞き屆けて下されと。願へば是非も中の間へ。見返りもせず行く父親。母は意地ば

る娘の手。引立て〳〵無理やりにオクリ納戸へ。へこそは入る月の。フシ影さへ見えぬ。目なし鳥。番放れず淺香姫。一間の内より俊德の。御手をフシ引いて忍び出で。詞今の樣子を聞くに付け。モウ暫くも此内にお前はどうも置きまされぬ。何ウ處なりとお供せうと。地手を引立つれば俊德丸。我が業滿てず母上に斯く迄思はれ參らするも。身の罪障とはいひながら。館を出でし頃には勝り。兩眼盲いたる其上に。かゝるけやけき姿をば。お目にかけなば母上の。詞愛着心は切れもやせん。案内せよ今一度。地御目にかゝつて其上に。入平夫婦も尋ね來ば召連れて立退かんと。宣ふ聲を聞きとる門口。詞アヽ我我夫婦は先刻より。始終の樣子承はる。此所に御座ある事里人の噂に聞けば。もし敵方へ洩れては大事。一刻も早く御供せんと。地氣を急く折しも駈出る玉手。ナウなつかしや俊德樣。お前に逢はうばつかりにいくせの苦勞物案じ。心を盡した甲斐あつて。お健なお姿見たわいなと。縋り給へば身をすり退き。詞ヘエヽ情ない母上樣。館にても申す如く。同氏さへも娶らぬは君子の禁戒。まして親子の中中に。戀の色のと斯程迄慕ひ給ふはお身ばかりか。地宿業深き俊德にまだ〳〵罪を重ねよとか。詞昔は桃李の粧なりとも。今は見る目も鬱悒き癩病。兩眼盲いて淺ましき姿はお目にかゝらぬか。これでも愛想が盡きませぬか。地道も恥をも知り給へと。ヌエ涙と共に。恨むれど。詞愚な事を仰しやります。そのお姿も私が業。穢いともうるさいとも。何の思はう思やせぬ。地自ら故に難病に苦しみ給ふと思ふ程。彌増す戀の種となり。一倍いとしうございますと。また取付けば不審ながら。詞フウこの業病を母上の。業と仰しやる其仔細は。地フシさればいな。地去年霜月住吉で神酒と偽り。詞コレ此鮑で勧めた酒は秘方の毒酒。癩病發する奇藥の力。中に隔をしかけの銚子。私が呑んだは常の酒。お前の顔を醜うして。淺香姫に愛相盡かさせ。我が身の戀叶よう爲。前世の惡業消滅と。家出ありしはよい幸。地跡を晦うて知らぬ道。長地お行方尋ぬる其中も君が筐と此盃。肌身放さず抱締めて。いつか鮑の片思ひ。雛面いわいなと御膝に。身を投げフシ伏して口説泣。地樣子を聞いて俊德丸。無念と思へど義理の親。恨もいはれず兎に角に。我が身の不運と御落涙。姫はいつそ涙も出ぬ。腹立紛れ取つて突退け。詞エヽ聞けば聞く程余りぢやわいな〳〵。玉をのべたお姿を。ようアノ樣にしやつたのう。母御の身として子に戀慕。人間とは思はねど。道ならぬ事も程がある。サア元のお顔にして返し

やと。地恨み余りてフシはしたなさ。地玉手はすつくと立上り。詞戀路の闇に迷うた我が身。道も法も聞く耳持たぬ。モウ此上は俊德様。何處なりとも連退いて。戀の一念通さで置かうか。邪魔しやつたら蹴殺すと。地飛びかゝつて俊德の御手を取つて引立つる。アラ穢らはしと振切るを。離れじ遣らじと追廻し。支へる姫を踏退け蹴退け。怒る眼元は薄紅梅。逆立つ髪は青柳の姿も亂るゝ嫉妬の亂行。門には夫婦が身に冷汗。堪へかねて駈出る合邦。娘が髻引掴みぐつと差込む氷の切先。あつと魂消る聲に恟り戸をめり〳〵。駈込む夫婦驚く御夫婦。詞情なや母上を手にかけしかと御涙。地娘を抱へる母親は。詞心からとはいひながら。ヲヽ術なかろ苦しかろと。地歎けば今更フシ人々も涙。涙を添へにける。地合邦は怒の顔色。筋骨立てて。詞ヤア皆何の爲に其涙。ナヽヽ何吠えるのぢや女房ども。われ泣いては左衛門様や俊德様御夫婦へ。心の義理が立つまいがな。此様な念の入つた大悪人を。まだおのりや子ぢやと思ふか。おりやもう〳〵憎うて。〳〵どうもかうも堪らぬ故。十年以來蚕一匹殺さぬ手で。現在の子を殺すも。浮世の義理とは云ひながら。これが坊主のあらう事か。コリヤ汝ばかりか此親迄。佛の教を背かして。無間地獄の釜焦げに。ようしをつたなア魔王めと。地刹る拳を手負は押へ。詞ヲヽ道理でござんす。道理ぢや〳〵憎い苦ちや。が是には深い様子のある事。物語るうち此刀。必ず拔いて下さんすなと。地苦しき息をほつと吐き。詞様子といへば外でもなく。外戚腹の次郎丸様。年かさに生れながら。後に生れた俊德様に。家督を繼がすを無念に思ひ。壺井平馬と心を合し。御世繼の俊德様殺さうといふ豫ての巧。推量ばかりか委しい様子。立聞して南無三寶。義理ある中のお子といひ。元は主人の若殿様。殺させては道立たず。此上は俊德様。御家督さへお繼ぎなくば。次郎丸様の悪心も自然と止んで。お命に別條ないと思案を極め。地心にもない不義いたづら。いふもうるさや穢はしい。妹背のかためと毒酒をすゝめ。難病に苦しめたは。詞お命助けうばかりの方便。戀でないとの言譯は。身をも離さぬ此盃。繼母の心子は知らぬ。片思ひといふ心の誓。地繼子繼母の義は立つても。嘸や我が夫通俊様。根が賤しい女故。見損うた淫奔者と。おさげしみを受けるのが。黄泉の障りになるわいのと。いへど合邦嘲笑ひ。詞それ程知れた次郎丸が悪事。ナヽ、なぜ通俊様へ告げぬぞい。たつた一口いひさへすりや。癇病にする事も。不義者にもならぬわい。口利根に

言廻したとて。今になつてそんな暗い言譯。くふ樣な親ぢやない。イヤ〳〵そりや父樣の御了簡違ひ。其樣子を夫へ告げなば。道理正しい左衞門樣。お怒あつて次郎丸樣。切腹か御手討は知れた事。次郎丸樣も俊德樣も。私が爲には同じ繼子。義理ある中にかはりはない。惡人なれど殺しては。先立たしやんした母御前が。草葉の蔭でも嘸や歎き。隔てた中ゆゑ訴人して。殺したかと思はれては世間も立たず。義理も立たず。通俊樣もお子の事。地何の心よからうぞ。あちやこちやを思ひやり。繼子二人の命をば。我が身一つに引受けて。詞不義者といはれ。惡人になつて身を果すが。繼子大切。地夫の御恩。せめて報ずる百分一と。言譯聞いて人々は扨はさうかと疑ひの。晴るゝ程猶母の歎き。詞ヲ、小さい時からの氣立でばさうなうて何とせう。曇靄もない人を。惡う云はすが口惜しい。そなたも嘸や口惜しかろ。心根を推量して可愛いわいの。〳〵〳〵可愛やと地咽び返れば父親は。詞コリヤ娘。其心でなぜに又俊德樣の跡追うて。家出したが合點が行かぬヲ、尤もなお咎なれど。何處迄も行方を尋ね。あなたのお目にかゝらねば痛はしやアノ癲病。御本復はごさんせぬと。地聞いて入平不審顏。詞フウ何と仰しやる。お前がお傍に付いてござれば。御本復なさるゝとは。さればの事。典藥法眼に樣子を打明け。毒酒の調合賴む折柄。本復の治法委しく尋ねしに。胎内より受けたる癲病ならず。毒にて發する病なれば。寅の年寅の月。寅の日寅の刻に誕生したる女の肝の臟の生血を取り。毒酒を盛つたる器にて。病人に與へる時は。卽座に本復疑ひなしと。聞いた時のその嬉しさ。それで〳〵此盃。地身に添へ持つて御行方。尋ね搜す心の割符。詞父樣。母樣。何と疑ひは晴れましてござんすかえ。フウスリヤそちが生れ月日が妙藥に合うた故。一旦は癲病にしてお命助け。又身を捨てて本復ささうと。それで毒酒を進ぜたな。アイ。ヘエ、出來しをつた出來した〳〵。娘コリヤやい。モ、、、何にもいはぬ。堪忍してくれ〳〵。日本は扨置き。唐にも天竺にも。今一人とくらべる人もない貞女を。畜生の惡人のと。憎て口いふばかりか。親の手にかけ酷い最期も。コ、この己が愚鈍なからぢや。地赦してくれとどうど居て フシ悔み。涙ぞ道理なる。地始終を聞いて俊德丸。數行の涙フシ拭はせ給ひ。地探り寄つて繼母の手を取り。押戴き〳〵。詞なさぬ中の義を重んじ御身を捨てての御慈愛。誠の親とも命の親とも。いふにも盡きぬ御厚恩。地身を百千に碎くとも何と報じ盡すべき。有難や

忝なやと頭を壘に付け給へば。そのお心とは露知らず。勿體ない道知らずとさげしんだのが恐ろしい。お赦しなされて下さりませと。兩手を合す姫の詫。天晴女の鑑とも云はるゝお身に惡名受け。かゝる御最期痛はしやと。入平夫婦も悲歎の涙。母は正體涙にくれ。ほんに此子が生れたは寅の年の寅の月寅の日の寅の刻。世間へ沙汰をせぬものと世の敎をば大事ぞと。夫婦親子の其外は犬猫にさへ隱したに。義理にせまれば我と我が身を責めはたる無常の虎。ひよんな月日に生れたは持つて生れた不運かと。歎けば道理と一座の涙。逢坂增井の名水に龍骨車かけし如くなり。地手負は顏を振上げて。詞豫て覺悟の今の最期。未練に歎いて下さる程。結句私が未來の迷ひ。此樣子を我が夫へ。具に賴むは俊德樣。不義の言譯立つならば。思ひ置く事一つもない。命を捨てた御褒美には。次郎丸樣のお命を。お助けなされて下さる樣。必ず〳〵父君へ。お願ひなされて下さりませ。イヤ〳〵〳〵叶はぬ迄も御養生。何卒存生へ下さるが。御慈悲の上の御惠子のため親を殺しては。我が身の冥加恐ろしい。ヲヽおやさしい事よう仰しやつて下さりました。さりながらとても助からぬ此深傷。死ぬるはかねゞ〳〵望の事。必ず親を殺したと思召しては私が罪。お腰元のこの玉手。お主の爲に身を果すは。武士の家では身の譽。泣いてやなど下さりますなサア〳〵父樣。コレこの鳩尾を切裂いて。肝の臟の生血を取り。此鮑で早う。地〳〵と氣をいる娘。後れる親。詞惜いと思うた張合なりやこそ。切りも突きもなつたもの。今では心底可愛い娘を。どうマアそれが酷たらしい。若役ちや入平殿とやら。大儀ながら賴みます。これは又迷惑千萬。主人の介抱お世話の御禮。どんな御用も相勤めうが。御主人同然の玉手殿。どこへ刄が當てられませう。こればかりは御免々々。名代には女房共。エヽこちの人にんげもない。勿體ない奥樣を。どうマアそれが。お赦しなされて下さりませ〳〵。エヽ未練な用捨。所詮その心底では叶ふまい。モウ人賴みには及ばぬと。懷劍逆手に取直せば。詞マヽヽ待つてくれ。娘とても生きぬそちが命。臨終正念未來成佛。地佛力賴む百萬遍。この人數でくる珠數の。輪の中で往生せいと。ハルフシ取り〳〵廣げる。珠數の輪の。中に玉手は氣丈の身がまへ。俊德丸を膝元へ。右に懷劍。フシ左に盃。外には父の親粒が導師の役と鉦撞木。母は涙の目も明かす。宵は死んだと思ひ子が。廻向の爲の百萬遍。今又無事なと悅んだも。露と消えゆく勸めの念佛。どうでも亡者になる

のかと。歎けば父もかきくれて。詞百八煩惱の絆を切れば。六道四生の苦を免れ。成佛正に疑ひなき。佛の金言僞りなくば。珠數の內こそ寂光淨土と。ハルフシ鉦打鳴らし。詞光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨地涙くり出す。珠數くり出す。なむあみだ佛。〳〵〳〵。見る目ひやいさ人々は。眼を閉ぢ氣をひき一心不亂。南無あみだ佛。〳〵〳〵〳〵〳〵。地內にはなんなく切裂く鳩尾。自身に血潮受けたる盃。差付ける手もわな〳〵〳〵。俊德丸は押戴き。母の賜物天地にも餘るばかりの御芳志と。唯一口に呑乾し給へば。不思議や忽ち兩眼開け。面色手足も瞬くうち。昔の姿に返り咲き花の顏ばせ見る手負。苦しき片頰に笑ひ顏。ヤア御本復かと一座の悅び。早や斷末魔の四苦八苦。鉦も早めて責念佛。なまいだ〳〵〳〵〳〵〳〵。願以此功德平等泰涙庭に。波打つばかりなり。地歎の中に母親は。頭の雪を打拂ひ。娘が菩提の尼衣。俊德君も涙をとゞめ。詞廣大無邊繼母の恩。せめて少しは報ずる爲。出世の後は此邊に一宇の寺院を建立し。母尼公を住侶とせん。繼母は眞女の鑑とも曇らぬ心は淸める江に。月を宿せし操を直に月江寺と號くべしと。地仰は今も尼寺と。常念佛の鉦の音に昔のフシ哀れや殘るらん。地父は常々勸進の閻魔の御頂持佛に居る。不產で死んだ娘が爲。詞地獄の苦患を助くるは。地自力他力に此佛體。建立して我が住家を其儘一つの辻堂に。營むも亦。平等利益。東門中心極樂へ。娘を往生なし給へと。願ふ心は後世の爲。現世の名殘數々は。百八煩惱夢覺めて。いつか再び鮑貝。涅槃の岸に浮む瀨と。箕に殘る盃の。逆樣事も善智識。佛法最初の天王寺。西門通り一筋に。玉手の水や。合邦が辻と。フシ古跡をとゞめけり。地かゝる所へ主稅之助。次郎丸壺井平馬高手小手に縛め來り。詞二人が惡事露顯の上大殿の御意を受け。君のお行方尋ぬる折から。里人が知らせに依つて御安泰の御尊顏。殊更離病御本復此上の悅びなしと。地申上ぐれば俊德丸。詞繼母の貞心つゞ〳〵に次郎丸の命乞。惡の根さしはこの平馬と。地入平が太刀風に首は大地へ落ち瀧津。和泉河內を打合せ。治まる御威勢高安の。俊德丸の物語書き傳へたる筆の跡千歲の。春こそ目出たけれ

安永弐癸巳歲

如月五日

作者　菅專助
　　若竹笛躬